広報市民リポーターだより⑥

岩尾先生のネパールの2年間

大館保健所長の岩尾昌子先生は、昭和六十三年四月から二年間ネパールへ結核予防の医療活動に行ってきました。先生がいた二年間は、ネパールにとって大事件の集中した期間であり、先生の多方面の活躍、その苦労は並大抵のものではなかったとお察しします。

七月十一日に中央公民館で開催された帰国講演会を聞き、もう一度お会いしたくて、保健所を訪ねました。

ネパールの日常

文盲率八〇%のネパール。私たちは、マンガで結核予防のカレンダーを作成し、各小学校に配布しました。ネパールでは、外国の援助で衛生教育にビデオや模型を活用しています。

平均寿命は、男性四十五歳、女性四十二歳。ヨード欠乏による甲状腺の病気、結核やライ病などの患者がたくさんいて、バスやトラックに乗ると隣の人の指が腐っていることも珍しいことではありませんでした。

月に一週間は、医療指導のために遠くの村に出かけました。肺炎と脱水で危険な状態の子供がいたので、カトマンズ（ネパールの首都）の小児病院に行くようにお金を渡しました。しかし、親は病院ではなく祈とう師の所に連れていき、数日後に子供は死亡したそうです。

大地震

一九八八年八月二十一日四時五十分、大地震発生。びっくりして跳び起き、外に逃げました。その日の夕方、ネパール東部で災害がひどく相当の死傷者が出ているという情報が入り、カトマンズにいる日本人の医療関係者で何か手伝いをしようと話し合いました。被災地はカトマンズから車で十二時間もかかるところなので、次の日に仕事の関係者から許可をもらい、薬などの物資を集めて車で送り、私たちは二十三日に飛行機で向かいました。同行者は、私のほかに外科医一人、看護婦三人、日本赤十字社の職員一人です。

災害発生から四日目にして、ケガ人の手当てを始めましたが、傷口がパックリ開いて骨が見えている人や傷口が化膿（かのう）している人などもかなりいました。私たちは、十時から十六時まで百七十四人を手当てしました。

その後、この地震で、約千人が死亡したと伝えられました。

経済封鎖

一九八九年八月、インドがネパールに対して経済封鎖をしたので、今までインドから輸入していたガソリンや灯油、プロパンガスなどが手に入らなくなりました。ガソリンはクーポン制になり、一週間に一〇ﾘｯﾄﾙしか配給されず、往診などで車を使う機会の多い私にとっては、厳しいものがありました。それでもカトマンズ市内には、発電所から電気がきていたので、病院の消毒操置（電気コンロ）は使えました。

外出禁止令

帰国も近い一九九〇年二月。民主化を求める民衆のデモ隊に警察や軍隊が発砲したため、死傷者が出ました。二月から四月までのデモ隊の犠牲者は約五百人。四月には、カトマンズ市内に外出禁止令も出されました。車の焼き打ち、路上に転がる死体などがあちらこちらで見受けられました。ネパール国内、空港の大混乱は長く続きました。

海外援助

私たちは、「ネパール人自身がネパール人を結核から守るのです」という教え方、医療活動をしてきました。

しかし、ネパール人の多くは、「お金をくれれば何かをする」、「お金をくれなければ何もしない」という考え方を持っているのです。確かにお金は必要ですが、ただ与えるだけではネパール人のためになりません。

最近は、ネパール人もだいぶ考え方が変わり、自分たちが力を出し合って対策を立てて仕事をするようになってきています。

〜・〜・〜・〜・〜・〜・

日本に帰って来て一番うれしかったことは、「温泉と木々の緑です」と答えてくれた岩尾先生を前に、私はとても穏やかな心境になりました。そして、日ごろの小さな悩み、つまらない出来事にあくせくしていた自分がスーッと消えていき、岩尾先生の話を聞いて本当に良かったと感謝の気持ちでいっぱいになりました。

ぜひ、先生のネパールの話をもっとたくさんの人に聞かせたいものだと強く思いました。

広報市民リポーター

野村裕子（川口）

▲野村リポーター（左）と岩尾大館保健所長

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載します。